Osaka University Knowledge Archive

Title	韓国仮面劇と狂言の比較研究 ： 「僧科場」「癩者科場」・「出家狂言」「座頭狂言」にみる宗教と笑い
Author(s)	金, 蘭珠
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58778
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

氏　　名	金　蘭　珠
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲 第　４２　号
学位授与年月日	平成１６年３月２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	韓国仮面劇と狂言の比較研究―「僧科場」「癩者科場」・「出家狂言」「座頭狂言」にみる宗教と笑い―
論文審査委員	主　査　教　授　尾　上　新太郎
	副　査　教　授　武　田　佐知子
	副　査　助教授　岸　田　文　隆
	副　査　教　授　米　井　力　也
	副　査　教　授　森　栗　茂　一

論文の内容要旨

０．はじめに

仮面劇は韓国の民俗芸能のなかでも一番代表的な存在であり、伝統庶民文化の華と称される。それが伝統文化とはいえ、1960～80 年代には軍事独裁政権に対抗する民衆文化運動の核心にあり、爆発的なエネルギーで韓国民主化勢力を団結させる底力を振った。また、日本最初のセリフ劇とされる狂言は、六百年を超える歳月の間日本芸能の代表として上演され、今日なお大衆的な人気を集めている古典演劇である。両者はともに中国の伎楽、舞楽、散楽、また追儺戯などにその起源が求められ、現存演目の処々にその痕跡を残している。なお、その素材の面からも主従間、男女間の葛藤や僧侶の堕落相などを描いている点において相当似通っているといえよう。このように同じ素材を扱い、しかも喜劇（または笑劇）という同一のジャンルに属している両演劇が、それを形象化していく過程においてどのような特色をみせ、またそれは何より起因するかを探るのは両演劇の特徴を明らかにすることであり、なお、それは両国の文化の特徴を読み取るうえでも興味深い示唆を与えると思う。なかでも両演劇の性格と、それが放つ笑いの個性は両演劇がもつ宗教的背景と深い関連性があるのではないかと思われる。そこで本論文では、僧侶と身障者を主人公とした作品、すなわち「僧科場」と「癩者科場」、「出家狂言」と「座頭狂言」を中心に、仮面劇と狂言における宗教的背景をさぐり、それがこれら作品の主題と笑いの特質にどのような関係をもっているかについて考察することにする。

１．韓日芸能史における宗教

韓国は古代国家と高麗をへて華やかな仏教文化を咲かせ、それが各種の芸能に与えた影

響も甚だ大きい。燃燈会(ヨンドゥンフェ)と八関会(パルガンフェ)で代表される仏教儀礼や宮中で行われた様々な仏教行事の場では当時の洗練された芸能が総結集され、また各地の寺院においても仏事の一環として様々な芸能が催された。一方、民間では古代国家から受け継がれた各種の巫俗祭儀が行われていた。それが、朝鮮朝の仏教抑制政策によって燃燈会と八関会のような仏教儀礼が衰退し、また宮中儺礼が廃止されると、いままで公儀の宗教儀礼の場で公演されてきた諸芸能は、村クッや巫クッのような巫俗信仰の祝祭の場で新しい居場所を見出すことになる。その過程で完成されたのが、すなわち韓国仮面劇であった。他方、日本においては狂言以前の先行芸能、すなわち、伎楽、散楽、延年、田楽、猿楽など、数多くの芸能が寺院行事の一環として行なわれ、また寺院に所属した専門の芸能者たちの活動によって発展してきた。そのような先行芸能の伝統を受け継ぎながら、全く新しい公演芸術として生まれ変わったのが狂言であるが、その狂言も近世までは寺社の神事や勧進のような宗教行事のなかで公演の機会を得ていた。このように両演劇において宗教はその形成と発展の過程で大きな役割を果たしてきた。従って、仮面劇と狂言がもつ劇的内容もしくは笑いの性格は宗教と大きな関わりをもっていると思われる。本論文が両演劇の笑いの構造や特性を捉える上で、宗教との相関関係を重視する根拠はここにあるといえよう。

2．仮面劇「僧科場」考

韓国仮面劇には僧侶が登場する場面が、他の役どころの場面に比べて圧倒的に多いが、それを普通「僧科場」とよぶ。「僧科場」に登場する人物を劇中の役割をもとに分類してみれば、上佐(サンザ)と八墨僧（墨僧(ムクスン)・オム僧・完甫(ウァンボ)がこれに属する）で総称される従者僧グループ、老僧(老長)、それから社堂(サダン)・居士(ゴサ)で分けることができる。このうち社堂、居士輩は歌舞と共に売春を行う賤民芸能者の姿で登場するが、仏教の芸能僧もしくは雑役僧を出自とする彼らが朝鮮朝末期にはその面影をほぼ完全に無くし、市井で体を売る賤民芸能者へ転落していた様子がみられる。上佐僧には辟邪勧慶の儀式舞を舞う宗教的な面貌と市井で戯れる破戒僧の姿が共存している。また、八墨僧は遊女（社堂）と戯れ、酔っ払って乱舞する堕落僧として現れるが、師僧の老長をからかう側面では階級秩序に反抗する基層民衆を代弁する面貌ももっている。長い間修行を積んだ高僧として現れる老僧は、女犯を犯し破戒してしまう。しかし、老僧と若い女性との性的結合のモチーフは、韓国叙事巫歌の「帝釈本プリ」に現れる神僧と女との性的結合と類似しており、また、自分の女と婚礼をあげた村の男を殺害する恐ろしい面貌からみて、単純な破戒僧としての面貌を越えて村の守護神的性格を持っていると思われる。仮面劇の僧侶には堕落した聖職者の面貌と共に村を訪れて戯れるシャーマニズムの生産神的要素が共存している。それには政治的弾圧をうけた朝鮮の仏教が民間信仰の世界に入り込み巫俗信仰として生まれ変わった歴史的事情が反映されていると見える。

3.「出家狂言」考

狂言に登場する僧侶たちは大体酒色が好きで、無知・無能である。従って、彼らは一般人もしくは自分の従者たちにも散々なぶられ、その失敗の話から笑いが生じてくる。彼らは時には村々を訪れては酒もりをし踊る遊行僧として現れるが、それには今日の落語のような話芸と雑芸をもって、自ずから芸能人化した日本僧侶の面影が反映されている。狂言の出家たちはつねづね村の後家や門前のいちゃに懸想するなど、性欲の面においても決して俗人に劣らず、また、酒狂いのあまりに弟子の子供達をなぐるうえ、檀那たちの前で踊り狂う老僧も出てくる。なお、渡世の方便として出家した俄か僧が横行し、普段は偉そうな顔をして自分の宗旨が世の中の衆生を救うと威張りながらも、実は経典や説法にはまったく無知で、おまけに愚鈍で物忘れも激しい。彼らの関心は本業の仏事の仕事より布施のことばかりにある。が、狂言がそれを描く態度はどちらかというと、鋭い非難や警戒のような深刻な態度は見られない。それには、あるがままの現実世界が究極の真理であり、悟りの世界として肯定する日本仏教独特の思想が多分に反映されていると思われる。すなわち、出家という形だけは守るものの、早くから出家の肉食や妻帯が当然のように行われるなど、出家修行の不可欠性がよわまり、だれでも仏になることができるという浄土教的な楽観説、現世主義、世俗化などの日本仏教の特色が狂言の出家にもよく反映されている。

4.「座頭狂言」考

芸能史上の座頭、すなわち琵琶法師の出自は仏教や民間信仰の布教を担った盲僧であり、日本において盲人と仏教との関係は古く且つ深い歴史を持っている。それは仏教が彼らの庇護者であったのみならず、彼らの自立を励まし才能を発揮させたためであろう。琵琶法師は中世芸能のもっとも重要な担当者として活躍し、彼らと同じ時空間で活躍していた猿楽者は彼らを素材に座頭狂言を作りあげた。本論文では「座頭狂言」の内容を大きく二つに分けて論じた。まずは「川上」と「清水座頭」という、神仏と盲人を素材にした作品を通して、当時の庶民が仏教をどのように受け入れていたかをみてみた。また、なぶられ笑われる盲人芸能者の姿を分析し、このように身障者を笑う狂言の趣向をいかに解釈すべきかについて論じたが、狂言が描く身障者の笑いは、必ずしも身障者への差別観念を植え付けるものではなく、自分の境遇を積極的に活用し当代の芸術家として活躍した彼らの姿から、根強い弱者たちのたくましい姿が見取れると結論付けた。

5.仮面劇「癩者科場」考

パンソリをはじめとする韓国の公演芸術、および『密陽百中ノリ』のような民俗芸能、古典文学には数々の身障者が登場するが、特に仮面劇の『野遊』と『五広大』には「癩者科場」があって注目される。そもそも『野遊』と『五広大』は正月十五日の年中行事とし

て行なわれた。正月の満月の下で、焚き火がこうこうとたかれるなか仮面劇は始まるが、癩者たちはその最初の場面から登場し、ゆったりとしたクッゴリ囃子に乗って「癩者の舞」を舞う。では、村の祝祭の場に彼ら身障者はなぜ現れるのであろうか。本論文ではその解答を韓国の巫俗祭儀であるクッの伝統からもとめた。多くの巫俗クッには雑神の一つとして盲人爺が現れ、開眼する場面が演出される。仮面劇の中に現れる癩者たちも、そのような不遇の雑神の化身ではなかろうか。すなわち、クッが身体の不自由な神霊たちを祭儀の場へ招いては、思いきり遊ばせることでその不具を慰め、また治療して帰すのと同じ原理が、仮面劇「癩者科場」にも内在していると思われる。

6.結論

本論文は韓国仮面劇と狂言における宗教と笑いの相関関係をさぐることを目的とした。日本芸能における宗教、特に仏教は実に力強いパトロンとしての役割をはたしてきたし、韓国芸能史においても仏教が諸芸能を生産発展させてきた事情は同じである。しかし、朝鮮朝以降仏教の代わりに民衆信仰のより所になった巫俗信仰は常に上層文化の主流宗教の地位につくことがなく、従って、その下で育った芸能もやはり、高級文化として洗練される機会を得られなかった。韓国仮面劇がエネルギッシュで、独創的な文化遺産として韓国を代表する古典演劇とされながらも、高級な公演芸術の場では疎外されたのもその所以であろう。この点、狂言が賤民芸能のなかから身を起し、中・近世を通して権力者層に享受され、今なお高尚な舞台芸術として愛されるのとは、対象的な道のりといえよう。仮面劇の笑いが破戒、喧嘩、不倫、下克上、悪口など、禁忌視され否定されてきたことを行い、いましめを破ることで、抑えられていた神明を発散する解放感を与えようとするものであるとしたら、狂言は同じような素材を扱いながら、その過ちを大らかな笑いでかばい、一座の人々が和楽になるのを重視した。韓国仮面劇の場合、そのような笑いの特性は巫俗信仰におけるクッの原理を受け継いだものである。これに対し狂言は「出家狂言」や「座頭狂言」を通してみてきたように、その笑いの多くの部分は仏教という巨大な源泉から汲み上げられたものである。さらに、「笑うことで祝福する」という「祝言性」をもとにしていた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本の狂言と韓国の仮面劇とを比較研究し、それぞれの特徴をはっきりさせたものである。両者は、共に笑劇であること、共に中国の芸能にルーツをもつこと、共に仏教の影響を受けていること、等、少なからぬ共通性を有する。

論者は、特には、これらの共通性のなかの仏教に着目し、それがどのように両者にかかわっているかを、それぞれの形成にまで遡及し、考察している。そして、両者における笑いの性格の違い、ひいては、劇としての性格の違いを明らかにしている。

以下、章を追って述べる、（「序論」と「第6章　結論」を除く）。
「第1章　韓・日両国の芸能における宗教」では、両国の仏教史に観点をおき、それぞれの芸能にそれぞれの仏教がどのように影響を及ぼしたかを考察している。また、シャーマニズムと仮面劇との関係についての考察もある。
「第２章　仮面劇『僧科場』考」では、当時一朝鮮王朝末期一の「僧科場」に登場する僧の性格を、同時代の国家・社会における仏教の（低い）位置との関係で考察している。そして、仮面劇の僧には、堕落した聖職者の面影と共に、原始的な力強いシャーマンの要素が見られ、その点に、政治的に弾圧を受けた当時の朝鮮の仏教の一種の蘇りが指摘されるとする。
「第3章　『出家狂言』考」は、日本の仏教の性格、日本の社会に占める仏教の役割の程度、等に観点をおき、狂言に登場する僧たちの扱われかたを問題にしたものである。
「出家狂言」に出る僧は、概して無知・無能で、僧としてふさわしくない振る舞いもするのだが、ただし、そういうことで笑いの対象にされるとは言え、鋭い批判の対象にされるわけではない。これは、日本の社会・歴史に占める仏教の役割が比較的大きく、かつ、その仏教が、日本的と言うべく、おおらかで世俗的であることと関係があるとする。
「第4章　『座頭狂言』考」では、盲人たちと「座頭狂言」の形成との関係についての考察がなされている。盲人が、「座頭狂言」の形成に、みずからかかわったであろうということについては、すでに複数の先学の指摘があるところだが、論者は、「川上」等の作品の分析を通し、より具体的にこの問題を考え、結果、言われているよりも、盲人たちは、もっとたくましく、当時の社会を生きたであろうと言っている。そして、そこには、日本の仏教が果たした大きな役割があったであろうとしている。
「第5章　仮面劇『癩者科場』考」では、仮面劇に登場する「癩者の舞」他についての考察がなされている。論者は、朝鮮王朝後期の国家の抑仏崇儒政策の影響で、仮面劇に登場する仏教の僧たちが、結果、仏教を離れ、民間宗教的なシャーマニズムの世界に身をおくようになったことを問題にしている。そして、シャーマニズムによって、人々の生のパワーをかき立てるということも。直前のことに、論者は着目する。「癩者科場」も、このシャーマニズムの線で捉えられている。「癩者の舞」は、「癩者」という身にハンディーをもったものを、村の祝祭の場に、一種の神として迎え、楽しませ、慰安し、帰す、という意味を有する。また、村人たちも、「癩者の舞」を見ることで、自分たちの生の苦悩、生活上の憂さを晴らし、生の活力を取り戻すのである。

本論は、日本の狂言と韓国の仮面劇という二つの笑劇を、仏教を中心とした観点から比較研究したものだが、結果、両者の笑いの性格の違い、演劇としての性格の違い、これらをはっきりさせることに成功している。
狂言の場合、笑いは、共同体を構成する人々相互の和楽という形で説明されるが、仮面劇の場合、生存の根本にふれる形でその感動がある点に特徴があり、時として、笑劇の範疇を超えている。問題にされる人生の深刻さが違うのでもある。仮面劇は、狂言に比べ、素朴とも、原始的ともされる。だが、ダイナミックという点では、仮面劇の方である。現代の韓国社会においても、仮面劇は政治批判の機能を果たしているということも、この際、考え合わせていい。
本論の特長は、あくまで、狂言と仮面劇との比較研究を通して論を展開し、以上のようなことに言及した点にある。この点で、評価される。
ただし、直前のことを前提にした上で言うことだが、気になる点、希望する点もある。

比較と言う時、それが可能かどうか、論考の前提として、有意識的に、明確に、考察しておくべきであろう。狂言と仮面劇とでは、その劇としての成立や脚本の成立に関する文献の存在にあまりにも時代的な隔たりがあるのである。

また、朝鮮王朝時代の国家の抑仏崇儒政策をもちだす時、それが当時の同国の社会や文化に与えた影響を、もっと多岐に渡って考察していたら、より説得力のある論文になっていたであろう。

また、それぞれの社会において、どういうたぐいの、身体に障害をもった人々が集団化したのかということを問い、はっきりさせ、その集団と芸能とのかかわりを考察していたら、より優れた論文になっていたであろう。